

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

基本発話動詞の覚書

著者	木内 修
著者別名	KIUCHI Osamu
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	52
ページ	269-283
発行年	2015
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008702/

基本発話動詞の覚書

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

木内 修

0. はじめに

本研究は、現代英語の発話動詞 (verbs of utterance) の中でも、より基本的な speak, talk, say, tell を中心にその中核的な意味の分析を試み、また、その意味に影響を受けた統語的な振る舞いを比較考察して、英語学習者に対する基本語彙の習得を正確かつより容易に促すことを主たる目的としている。さらに、発話動詞が含まれる動詞句などの慣用表現の成り立ちを明らかにする。本稿での考察のデータは、筆者が個人的に構築している児童文学コーパスや英米小説コーパスを中心とする。基本動詞の研究の成果といえば、小西 (1980) があるが、そこでは次のような類語解説がある。

speak, talk は、おおよそ「話す」に、say は「言う」に相当する。すなわち、say は「言う」という行為を表すのに対して、speak, talk では話すことが内容のあることがらであることを含意する。
(小西 (1980: 1328))

このような説明で、どれだけの英語学習者がこれらの類義語を正確に使い分けできるだろうか。少なくともこれを読む限り、事実とは大きく異なるイメージを学習者は身に付けてしまう危険性があるのではないか。本研究の必要性和緊急性はこのような参考図書の現状にある。

1. say と tell

1. 1 say と tell の概説

発話のその内容を相手に伝える際に使用されるのが直接話法や間接話法という文構造で、そこで生起する述語動詞の代表格が say と tell である。理屈上、話者と聴者と発話内容である被伝達部の3つが構成要素である。Say の方は文脈的に明示する必要がない場合や明示できない場合は聴者が欠落するときがある。

まずは、直接話法と間接話法の典型例を挙げておく。

- (1) “They’re coming,” he said to his companions.

(Christopher Golden, *Ghosts of Albion: Accursed*)

(「彼らはやってくるよ」、と彼は仲間たちに向かって言った)

- (2) You told me that you would take trips with Garvin to Japan and Korea.

(Michael Crichton, *Disclosure*)

(君はぼくにガーヴィンと日本と韓国に旅行に行くつもりだと言っていたね)

話しかける対象は、(3) の例文のように背景で聴いているはずと想定されるものならば、人間以外の物でも生起できる。

- (3) “Oh, you knew?” Mum said to the phone. (Diana Wynne Jones, *Fire and Hemlock*)

(「あら、知っていたの」と電話口に向かって母さんは言った)

中学校の履修項目であるこの話法の基本単語である tell には意外な落とし穴があり、上級者向けの英文法書である安井 (1996: 326) では、「tell は間接話法だけに用いられ、必ず人を表す目的語を必要とする」と明言してしまっている。当然、say の直接話法に比べれば、あきらかに頻度数は少ないが、丹念に英文を読んでいれば、(4) のような tell の直接話法の事例に遭遇する。

- (4) “Mother wants me to take over the businesses,” David told her, “but I’m not sure that’s how I want to spend the rest of my life.”

(Sidney Sheldon, *A Stranger in the Mirror*)

(「母は私にその仕事を引き継ぐことを望んでいるんだ」とデイビットは彼女に語り、「でも、私はどうやって残りの人生を過ごしていきたいのかがよく分からないんだ」と言った)

この段階で、say と tell の違いは単純に直接話法と間接話法といった対立にあるのではなく、別の性質の違いが潜んでいると考えるのが妥当であろう。本稿では、先に暫定的な結論を提示し、その後、さまざまな事例で確認していくというスタイルをとる。

sayは「何かを直接的に言葉で表現する。」という意味である。よって、具体的な発話内容に焦点が当てられているので、相手に伝えるという意味は相対的に弱くなり、聴者の存在は

義務的ではなく、聴者は省略したことが多い。

tellは「誰かに情報を知らせる」という意味である。伝えるべき内容を知らせることに重点が置かれている。情報伝達は情報をものに見立てた授与構文が典型例で、二重目的語構文の形式をとりやすいのは、tellの意味がこの形式を要求したものといえる。広い意味で何かを伝達させることを意図しているので、必ずしも言葉を使うとは限らない。

1. 2 say の事例研究

それでは、say の事例から検討、考察を行っていくことにする。(1) は say の間接話法の事例である。ここで tell が使用できないのは、発話内容だけが提示され、聴者が背景化されたためである。このような状況に say と tell の棲み分けが見られる。

- (1) The doctor said I must eat. (S. Maugham, "The Three Fat Women of Antibes")
(お医者様が食べないといけないと言ったの)

時計は時間を外の世界に示し、本は本の外の世界にいる読者に対してその内容を示している。

- (2) Grandad's clock says¹ you have five minutes." (John Updike, *The Centaurus*)
(お爺さんの時計では、あなたはまだ5分あるよ)

- (3) "No, no, the book says counterclockwise!" she snapped.
(J.K. Rowling, *Harry Potter and the half blood prince*)
(「いや、いや、本によると反時計回りだと」と彼女はぴしゃりと言った)

さらに、実際に音声は発しないが、主語が聖書という本であるにもかかわらず、引用符を使った直接話法で表現する場合もある。

- (4) The holy book says 'Blessed are the peacemakers'....
(John Vornholt, *Star Trek Next Generation TNG - 087 - A Time to Be Born*)
(「平和を作り出す人たちは幸せである」と聖書にある)

say が実際に発せられた言葉のときは、音声そのものが重要で、その中身は二の次で吟味されない場合がある。音声聞き取れないときは、音声情報の欠落を補充するためにつぎの

ような表現となる。

- (5) Jackson shook his head. “Wait, what did you say?”

(Jenn Kelly, *The Tale of a Boy, an Elf, and a Very Stinky Fish*)

(ジャクソンは首を振って「待て、君は何を言ったんだ」と言った)

また、読み方を聞くときには、つぎのようになるが、いずれにせよ、音声よる情報に重きを置いている事例であることが重要な共通項である。

- (6) ...he said at once. “Oh, how do you say ‘thank you,’ Father?”

(James Clavell, *Shgun*)

(彼は直ちに言った。「父さん、thank you ってどういう風に言うの」)

nothing, anything, something などの不定で漠然としたことを意味する語を目的語にとることが出来るのは say である。伝えるべき情報内容が不定ならば不定のまま示すのである。なぜ、tell は取りえないのかはのちに議論することにする。

- (7) Meeka shook her head and said nothing.

(Jenn Kelly, *The Tale of a Boy, an Elf, and a Very Stinky Fish*)

(ミーカは顔を振って何も言わなかった)

- (8) Nobody should ever say anything they don't like, or tell a joke they don't like.

(Michael Crichton, *Disclosure*)

(誰も彼らが好まないことは言うべきではないし、彼らが好まない冗談を言うべきではない)

- (9) “Have I said something to offend you?” he asked.

(Sidney Sheldon, *Master of the Game*)

(君を怒らせる何かを私はいったかね)

1. 3 tell の事例研究

ここからは、tell の個別の事例を検討していくことにする。まず、Swan (205: 491) では、つぎのような tell の非文情報を示している。

非文情報

- (1) a. He said, "Good morning."
 b. *He told them, "Good morning."
- (2) a. Mary said, "What a nice idea."
 b. *Mary told us, "What a nice idea."
- (3) a. "What's your problem?" I said.
 b. *"What's your problem?" I told her.

上記の事例で tell は命令する (order) や指示する (instruct) の意味であるために非文であると Swan (492) は述べているが、これは後付けの説明である。tell の直接目的語に発話内容が直接話法の形で生起しているが、情報構造から考えて聴者にとってこれが価値ある新情報でなければならない。よって、tell の意味は相手にとって分からなくて判断できないことを新情報として提示する "instruct" や "inform" といった「教える」という意味に解釈される場合は問題ないが、新情報としての提示を意図しない挨拶や感嘆文、そして疑問文を導くことが出来ない。そもそも tell は「特定の相手に情報や指示を伝える」という「メッセージの伝達」が強調されている語である。つまり、この非文は tell の意味と被伝達部の意味との整合性の問題が原因である。

現代英語では、tell は情報伝達の意味を持っており、その系列の意味を持つ単語は自然と同じような統語的な特徴をもつ。つまり、何かを誰かに伝えるわけであるので、その情報を受け取る人間が意味的に義務的な要素となる。そのために、何かを伝えて思い出させる remind + 人、何かを伝えて納得させる convince + 人の形式をとり、さらにその伝達すべき情報を of 句で表現したり that 節で表現したり、to 不定詞で表現しうるのは偶然ではなく、意味が形式に影響を与えて作っているものであることの証左ともなろう。

するとこの情報の伝達という意味が薄れれば、情報を取得する目的語の人は不要となり、他の文形式を選択することになる。1. 1 で tell と give の類似性は指摘した。次の示すように二重目的語構文の典型的な動詞である give でさえ、受益者たる間接目的語を明示しない用法がある。すると主語の内部から何かを放出するという意味になる

- (4) He gave a deep sigh. (S. Maugham, "Appearance and Reality")
 (彼は深いため息をついた)
- (5) ...the sun gives light and heat....

(Mark Twain, *Christian Science and the Book of Mrs. Eddy*)

(太陽は光と熱を出す)

tell の直後に人が生起しない文には、まず (6) のようなものがある。

(6) Imprisonment began to tell upon him.

(Charles Dickens, *Little Dorrit*)

(収監したことが彼の身に応えだしてきた)

(6) は述語動詞 tell によって、主語の内部エネルギーを放出することから、主語が (up) on 以下のものに対して「ある事柄を与える」という意味を生み出すことになる。この効果それ自体にはプラス評価もマイナス評価もない。文脈的にプラス評価ならば、「有利に働く」という解釈が成立するだろうし、マイナス評価の文脈ならば、「悪影響を与える」などの解釈を生じさせるのである。

さて、tell off という句動詞には幾つかの語義が存在するが、その淵源は「数えながら分ける」といった tell の語源の「数える」が (7) ではそのまま使われている用法である。そして次の (8) は、仕事を分解し、その部分を誰かに名前を語って指名するところから、「仕事などを割り当てる」という意味が派生した。(9) の事例が現代英語での tell off における高頻度の語義で、目的語との関係を off の状態（切り離す→突き放すイメージ）にすることを聴者に伝えている。つまり、目的語に語ることでの影響が本来は仲間として心理的に接触していたものが、分離する効果を発することなので、「叱る」という意味が語用論的に生じたものであると考えられる。このように受動態が可能なのは、ここでの tell の有する他動性が高い証拠である。また、他動性が高いことは述語動詞の目的語に対して影響を顕著に与える意味を生じさせる背景となっているのである。

(7) Two score and twelve were told off.

(Charles Dickens, *A Tale of Two Cities*)

(52個を数えて分けた)

(8) Bumpo had been told off to go downstairs and prepare dinner for us.

(Hugh Lofting, *The Voyages of Doctor Dolittle*)

(バンポーは階下に行って、私たちの夕食の準備をするように仕事を与えられた)

(9) Outside in the hall he nearly ran into Dudley, who had been lurking behind the door, clearly hoping to overhear Harry being told off.

(J.K. Rowling, *Harry Potter and the Goblet of Fire*)

(玄関ホールの外で、彼はダドリーにもう少しでぶつかりそうになった。ダドリーは明らかにハリーが叱られているのを盗み聞きしたくドアの向こうで潜んでいたのだった)

つぎは、tell the difference という表現を考えてみることにする。「違いを言える」ということから「違いが分かる」という前提を類推でき、tell の語義の「区別する・分かる」というところまで意味が拡張しているのが分かる。

- (10) I've been wondering, how do you tell the difference between an Inferius² and a ghost?
(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Half-Blood Prince*)
(亡者と幽霊の違いはどうやって区別するのかなと思っている)

さきほど、1. 2 では say は不定代名詞を目的語に要求できるが、tell はそれが出来ないと述べた。その理由は、tell は不定代名詞という曖昧模糊とした情報だけを何の加工もしない状態では伝えるべき価値ある情報ではないので、tell の目的語にすることは出来ないのである。情報を聴者に伝えることを本義とするのであるから、それなりの情報価値が求められるのである。さらに、tell が直接話法より、間接話法で好まれて使用される背景は、直接話法が聞こえた音声そのまま丸ごと提示するといった単純な方式であるのに対して、間接話法は音声情報をいったん整理して、吟味し、洗練したものになるため、say に比べれば結果的にフォーマルな表現形式となる。

1. 2 の例文の再録であるが、「冗談を言う」はつぎのように、tell a joke である。慣用表現と言ってしまうとそれまでであるが、なぜ say a joke とならないのかを考えることは、say らしさ、tell らしさを見極めるのに必要不可欠な特徴が隠れていると思われる。そもそも say は目的語に聴者を取らない。聴者を言語化するときには、前置詞 to を用いるわけで、述語動詞の目的語に聴者をとる tell と示唆的な違いがみられる。冗談か、冗談でないかはまず、その発話内容で判断されるわけで、さらにその判断は話者の言いつばなしではなく、聴者の存在を要求するものである。このような場面を要求する概念であるために a joke は述語動詞に say を要求せず、tell を取ることになるのである。

- (11) Nobody should ever say anything they don't like, or tell a joke they don't like.
(Michael Crichton, *Disclosure*)

(誰も彼らが好まないことは言うべきではないし、彼らが好まない冗談を言うべきではない)

最後に tell が二重目的語構文を取らずに、伝達内容の直前に前置詞を要求する事例を確

認しておくことにする。述語動詞 tell の直接目的語にはすべての名詞が生起できるわけではない。その名詞が伝えるべきものそれ自体であり、伝達内容を含んだものでなければならない。伝達する内容が欠落していて、その項目のみの名詞の場合は前置詞 about や of が要求される。このことは、日本語で考えても「太郎は花子に事実を語った」は適格文であるが、「太郎は花子にあの事故を語った」は容認度がかなり下がる。適格文にするには「太郎は花子にあの事故について語った」と「ついて」や「関して」を補わなければならない現象と軌を一にしているものである。

- (12) People told him about all the rules and regulations and that how he will be sent to an island after one year. (100-Moral-Stories-for-Kids)³
(人々は彼が一年後に島にどんなふうに送られるかというあらゆる規則や規約について彼に説明した)

最後は、tell a tale が同族目的語構文の形式を取りつつ、受動態経由の過去分詞の後置修飾を生み出した事例である。これは受動態の「特徴付け」が機能しているものである。

- (13) A tale told by an idiot. (Somerset Maugham, “Virtue”)
(痴人の話すようなたわいない事柄)

2. speak と talk

Swan (2005: 543) では、speak と talk の両者の違いはほとんどない (little different) と説明している。ただ、あえてその違いに言及すると talk は格式張らないやりとりの際に、より使用される。一方、speak は真剣で形式的な状況下で頻繁に使用されると説明している。しかし、これは記述レベルであり、母語直感によるものである。問題は speak と talk のどこの違いにこれらの使用上の差異を生じさせるものがあるのかで、それを説明する必要がある。その部分を明示すれば、英語学習者は、項目ごとを丸暗記する作業から解放されるであろう。

この speak と talk の共通点を先に考察し、say と tell の意味と比較対照してから、speak と talk の本質を考えていくことにする。say や tell とは異なり、情報の伝達に重きを置くものではなく、動作として「言語音を発する」ことを表現している。そのために、say や tell が情報内容を示す that 節を目的語として後続させることが出来るのに対して、speak や talk は自動詞が基本であり、that 節は取りえない。学校内の英語の授業で “Speak English.” という表現があるが、これは、speak の用法からして言えば周辺的な用法である。前提として複数話すことのできる言語があるときにほかの言語と対比を意識して使うものである。つ

ぎの例文のように speak も talk も話す言語を後続させることが可能なのは、これらの言語音を発するという意味であるから。しかしながら、コーパスなどで確認する限り使用頻度は、speak の方が高い。では、なぜ speak と talk の間に使用頻度の差が生じるのか。これも speak と talk の本質的な特徴を分析することで納得のいく答えを導き出せる。つまり、ある言語で話すとはその言語音を出すことに焦点が置かれ、対話という側面は背景化されている。よって、対話に重きを置いた talk ではなくて、言語音を出す側面を前景化した speak が選択されるのである。

- (1) We went into the sushi bar. There was a lot of bowing and greeting. Connor spoke Japanese and we sat at the bar. (Michael Crichton, *Rising Sun*)

(われわれは寿司屋に入った。沢山のお辞儀があり、歓迎の言葉があった。コナーは日本語を話し、われわれはカウンターに座った)

- (2) When she talked English the maid's face tightened.

(Ernest Hemingway, "Cat in the Rain")

(彼女が英語を話したとき、メイドの顔がこわばった)

(3) の例文で示唆的なのは、talked と spoke の対比的な場面である。話し合いのときには talk が使われ、結果を通達する一方的な発言のときには speak が使われている。また、(4) の例文では、誰にも声をかけないといった文脈では speak が使用され、対話が成立している場面では talk が使用されている。

- (3) They talked amongst themselves for three minutes and then Syarm spoke. "We disagree." (Obert Skye, *Leven Thumps and the Ruins of Alder*)

(彼らはみんなで3分間話し合い、それからシャームが言った「我々は反対です」)

- (4) Cinderheart hadn't even looked at him since they'd talked, and Leafpool had hardly spoken to anyone. (Erin Hunter, *Night Whispers*)

(彼らが話すようになってから彼のことをシンダーは見えていなかった。そしてリーフプールは誰ともほとんど自分から話しかけることがなかった)

speak と talk の共通点は言語音を発することであるが、その差異は誰に向かったの発話なのかである。talk は相手を認識しての発話であり、よって特定の相手と話すことになる。この背景から talk が打ち解けた会話に好まれると感ずるのである。これはあくまでも現象

であり、talk の本質ではない。(5) の例文は名詞の talk であるが、「協議」「会談」の意味がある。このことを可能にするのがまさに、聴者が特定の者として存在している状況である。それに対して (6) のように speak は不特定多数に、一方的に発話することが可能である。

(5) She was not looking forward to this meeting. It would be with someone she had met before, for preliminary talks ;

(彼女はこの会議に期待はしていなかった。それは彼女が以前会ったある人と一緒になると思われたのだ。予備会談で)

(Judy Klass, *Star Trek Original Series TOS - 046 - The Cry of the Onlies*)

(6) All hands, this is the Captain speaking.

(Robert Sabaroff, *Star Trek Original Series Bantam Episodes - 009 - Immunity Syndrome.*)

(乗組員全員、こちらは船長だ)

speak は聴者が特定なのか不特定なのかを問題にしない動詞である。そもそも tell のように情報伝達に意味の比重を置いているものではなく、発話するという動作に比重が置かれている。さらに、talk は特定の聴者を前提にしているが、この speak はその前提がないので、不特定に対して、さらに対話ではなく、一方的な語りになりうる。これが名詞形の speech と繋がっていくのである。さまざまな辞典類にあるように、talk と speak の差異が単純に「略式」「格式」といったような文体の問題でもない。これは、それぞれの動詞のもつ意味の差が生起する構文とともにさまざまな含意を生じさせているのである。

2. 2 speak の事例研究

(1) の主語は eyes であり、対話ではなく目の表情は彼女の内部に潜む情報を一方的に外へ放出しているのである。また、(2) のように悪口を言うのも一方的な行為であるので、talk ではなく speak が使用されるのは自然なものである。

(1) ...her eyes spoke full as eloquently as her tongue.

(Charlotte Bronte, *The Professor*)

(彼女の眼は口に負けず劣らず十分なほど雄弁に語った)

(2) Don't let anyone speak ill of him.

(G. B. Shaw, *You Never Can Tell*)

(誰だって、彼に対しての悪口を許してはいけない)

(3) の例文のような what to say の代わりに what to speak は存在しないが、(4) の例文のように how to speak は存在する。このような疑問詞 + to不定詞の生起可能性は疑問代名詞ならば他動詞、疑問副詞であったら自動詞がくるといった、それぞれ say と speak が他動詞か自動詞かの問題で解けるものである。

(3) “I -- ” She stopped, not knowing what to say.

(Sidney Sheldon, *A Stranger in the Mirror*)

(「私は・・・」と言いかけて彼女はやめた。何と言ったらよいのか分からない)

(4) “By Gar, mate! you know how to speak to the cops,” he said in a voice of awe.

(Arthur Conan Doyle, *The Valley of Fear*)

(「なんて、お前、警察にどう話しかければいいか分かっているな」と彼は畏れた声で言った)

言うまでもなく、疑問副詞であっても、(5) のように他動詞に目的語を明示すれば問題なく成立する。

(5) Oliver detailed briefings on what to say, when to say it, and how to say it.

(Sidney Sheldon, *Best Laid Plans*)

(オリバーは何を話すか、それをいつ話すか、それをどんな風に話すかという打ち合わせで詳しく述べた)

つぎのような、generally や frankly などと共に起している文体離接詞 (style disjunct) とともに独立分詞構文を形成するのも talking ではなく speaking の方である。語り方や語る内容は対話ではなく、やはり一方的な言語音の放出であるからだろう。

(6) But, generally speaking, that's correct, according to Doctor.

(Dorothy Sayers, *Busman's Honeymoon*)

(しかし、一般的に言って、それは正しい。医者によるとだけだね)

最後は、文字通り言語音そのものに意識を向けたものになる。もっと大きな声で話すことを要求している場面である。ここに至っては、言葉の意味など何もない。

(7) 'You're mumbling again,' said Mr Wonka. 'Speak louder next time....'

(Dahl Roald, *Charlie and the Chocolate Factory*)

(「お前はまたぶつぶつ言って。今度はもっと大きな声で話さない。」とワンカが言った)

2. 3 talk の事例研究

(1) は aloud という単語で明示されているように音声化していることは誰にでも分かる。(2) の例文は、他者が耳にしているわけであるので、音声化されている。また、(3) の例文は、名前を繰り返すシーンは、ふと思うのではなく音の響きを確認している動作があるで、音声化されているといえよう。(4) は心の中で感じる場面で声に出す必要はない場面である。整理すると talk to oneself は「独り言をいう」であり、声に出しているものである。一方、say to oneself は声に出して「独り言をいう」場合もあるし、また声に出さず、「心の中でいう」つまり「心の中で考える」との意味になる。前節で考察しての通り say は「言葉で表す」だけの意味で、言語音を出すことは前提にはないのである。他方、talk はそもそも言語音を出すことが基本義であるので、音声化は義務的である。(5) の speak to oneself の形式は辞書の見出しなどにはあまりないが、ときどき出てくるものである。speak は talk と同じく音声化を伴うわけだが、自己対話というイメージよりも、一方的に自分自身に命令している感じがあり、そのために、「言い聞かせる」との訳語が可能となる。

(1) He talked to himself aloud and waved his arms....

(Somerset Maugham, *Atalina*)

(彼は独り言を声に出して言って、両腕を振った)

(2) All I could hear was that he talked to himself excitedly in his own language.

(Wilkie Collins, *Armada*)

(私が耳にしたのは、彼が母国語で興奮しながら独り言をつぶやいていたことだけです)

(3) Emilia Moon lay in bed in her tidy white room. "Emma Tolly" she said to herself. She repeated the name and decided she liked it much better than Emilia Moon.

(Jenny Nimmo, *Red King 01 - Midnight for Charlie Bone*)

(エミリア・ムーンはこぎれいな小さな白い部屋でベッドに横たわっていた。「エマ・トリー」とその名前を繰り返した。それをエミリア・ムーンよりは断然気に入ったものだと考えた)

- (4) “I know I shall be a great artist,” he said to himself. “I feel it in me.”

(Somerset Maugham, *Of Human Bondage*)

(「偉大な芸術家になるんだ、それを身体の中に感じるな」と彼は密かに思った)

- (5) She breathed deeply and spoke to herself. “Be calm, Abby, be calm. He’s out there somewhere.”

(Grisham John, *The firm*)

(彼女は深呼吸をして、自分に言い聞かせた。「落ち着いて、アビー、落ち着いて。彼はどこかに出かけているんだわ」)

(6) は留守番電話のメッセージ音に対しての応答として録音している感覚で talk が使われているものと思われる。(7) はペットの犬に話しかけていて、ペットと主人との間に心の交流も垣間見られるところであろう。(8) は鳥たちのさえずりは、言うまでもなく鳥たちの間での対話である。

- (6) ...he had called Lewyn and had talked to his answering machine.

(Michael Crichton, *Disclosure*)

(彼はレヴィンに電話をかけ、留守番電話に語り掛けた)

- (7) He whistled and talked to his dogs.

(Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*)

(彼は口笛を吹いて、そして自分の犬たちに話しかけた)

- (8) He listened hard. Only birds were talking.

(Cornwell Patricia, *Southern Cross*)

(必死に彼は耳を澄ました。聞こえてくるのは鳥たちのさえずりだけだった)

(9) の talk back は「口答えする」という意味であるが、口答えするためには、話者と聴者の役割交替が必要で、形式上、対話を成立させることになるので、talk が使用されることになる。(10) では、日本語でも偶然、「金がものを言う」との表現があるが、この英語の “money talks” はやはり、talk を使っているところが重要である。つまり対話という話者と聴者とのやり取りが前提として存在し、言語による対話では結論が出ず、最終的に他のものではない、お金で話に決着をみることになることを表現しているのである。

(9) But no one talked back to Scarlett these days.

(M. Mitchell, *Gone with the Wind*).

(しかし、近頃では誰もスカーレットに口答えはしなかった)

(10) And let's face it, they're making money, finally, and money talks.

(Margaret Atwood, *The Robber Bride*)

(ひるむことなく、立ち向かおう、彼らはお金を稼いでいる。結局はお金がものを言うのだ)

3. おわりに

本稿は、現代英語の発話動詞 (verbs of utterance) の中でも、より基本的な speak, talk, say, tell を中心にその中核的な意味の分析を試み、また、その意味に影響を受けた統語的な振る舞いを比較考察して、次のような結論を導いた。

say と tell は主語が持つ情報を示す機能があり、say は直接的に情報を示す機能に特化している反面、他者に伝達する意図は弱い。それに対して、tell は情報を伝達する機能に特化している特徴がある。

speak と talk は情報を示すことではなく、言語音を出すという動作に焦点が置かれている。speak はその聴者が特定の、非特定のかを問題にしていないため、talk に比べて一方的な方向性を有した行為が可能である。それに対して、talk はその聴者が特定のであるために、話者にとって認識可能な相手となり対話が成立することになる。

また、発話動詞が含まれる動詞句などの慣用表現を一般英語学習者は、従来の反復による暗記から脱し、それぞれの動詞の本質的な意味を理解した上で習得する道筋を提示した。

参考文献：

小西友七 (編) 1980. 『英語基本動詞辞典』 東京：研究社出版.

Swan, M. 2005. *Practical English Usage* (3rd ed.) Longman : Oxford University Press.

安井稔 1996. 『改訂版 英文法総覧』 東京：開拓社.

¹ 例文中の下線はすべて筆者による強調である。

² 亡者 (Inferiの複数形) は、J・K・ローリングの小説『ハリー・ポッター』シリーズに登場する死体のこと。

³ この例文はネットで公開されているe-bookのデータである。2015年9月23日現在次のアドレスで読むことができる。

(<http://www.ezsoftech.com/ebooks/100MoralStories.pdf>)

Notes on basic verbs of utterance

KIUCHI, Osamu

The primary of objective of this study is to investigate the proper use of the verbs of utterance such as *say*, *tell*, *speak and talk* on the basis of the data of the computer corpus of my own making.

The secondary of objective of it is to provide the necessary information concerning semantic structures of idiomatic expressions with the verbs of utterance for English learners.